慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『源氏物語』東屋巻と浮舟巻のはざま：右近は二人か
Sub Title	
Author	髙橋, 諒(Takahashi, Ryo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	三田國文 No.61 (2016. 12) ,p.1- 12
JaLC DOI	10.14991/002.20161200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20161200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『源氏物語』東屋巻と浮舟巻のはざま

――右近は二人か――

髙橋　諒

はじめに

『源氏物語』の宇治十帖に登場する右近という女房の働きは、物語の展開上、重要な意味を持つ。最もめざましい働きをするのは、浮舟巻であろう。右近は匂宮を手引きし、浮舟との逢瀬を成立させる。また、自身の言動から図らずも浮舟が入水を決意するほどに追い詰めてしまう。蜻蛉巻では、浮舟の失踪後、入水したと判断し浮舟の母に事情を説明して、薫の来訪前に葬儀を執り行う。その後、匂宮・薫に浮舟の心情や死の真相を語るなど、浮舟の失踪による事後処理を行う。このように、浮舟物語において、右近は不可欠な存在としてある。

その右近について、東屋巻と浮舟巻の叙述に「矛盾」があるとされ、古来、人物の認定に混乱が生じていた。それは、現在もなお解決されていない問題である。[1]

本稿は、右近の人物認定の問題を再検討したものである。以下、まずはその研究史を俯瞰し、右近を二人と見る説、一人と見る説（以下、二人説、一人説）の整理を行う。そして、この問題が右近の設定を変更したことで引き起こされたことを述べる。さらに、右近の設定が変更されたという設定の問題から、浮舟巻以降の構想は、東屋巻までの構想とは異なるという構想の問題にまで言及する。従来解決されてこなかった右近の問題を捉え直し、『源氏物語』東屋巻・浮舟巻における構想に迫ることを目的とする。

一、宇治十帖の右近

宇治十帖で初めて右近が登場するのは、東屋巻である。匂宮が浮舟と共にいるところを乳母に咎められ、それでもなお、浮舟から離れようとしないため、格子を下ろしにやってきた右近によって、制止される。

【A】

右近とて、大輔が女のさぶらふ来て、格子おろしてここに寄り来なり。……「例のけしからぬ御さま」と思ひ寄りにけり。……「げにいと見苦しきことにも侍るかな。右近はいかにか聞こえさせむ。今参りて、御前〔＝中君〕にこそは忍びて聞こえさせめ」とて立つを、

（東屋／⑦三一〇～三一一頁）

東屋巻で、右近は「大輔が女」とある。大輔は中君に仕える古参の侍女で、右近は大輔と共に中君に仕えている。東屋巻では、中君に仕える女房である。

ところが、浮舟巻に至り、匂宮が宇治の邸に忍び込み、垣間見をするくだりでは、次のようにある。

【B】

〔匂宮は〕やをら上りて、格子の隙あるを見つけて寄りたまふに、……火明う燈して、もの縫ふ人三四人ゐたり。童のをかしげなる、糸をぞよる。これ〔＝童〕が顔、まづかのほのか(2)に見たまひしそれなり。「うちつけ目か」と、なほうたがはしきに、右近と名のりし若き人もあり。君〔＝浮舟〕は、かひなを枕にて、火をながめたるまみ、髪のこぼれかかりたる額つき、いとあてやかになまめきて、対の御方〔＝中君〕にいとようおぼえたり。

（浮舟／⑧二四頁）

匂宮が、二条院で見かけた女君が、宇治の邸にいる女君と同一か、確認する。その際、童（点線部）と右近（傍線部）の存在によって、同定している。二重傍線は、次の叙述を踏まえる。

【B'】

夕つかた、宮〔＝匂宮〕こなたにわたらせたまへれば、女君〔＝中君〕は、御ゆするのほどなりけり。人々もおのおのうち休みなどして、御前には人もなし。……宮〔＝匂宮〕はたたずみありきたまひて、西の方に例ならぬ童見えけるを、「今参りたるか」などおぼして、さしのぞきたまふ。

（東屋／⑦三〇七～三〇八頁）

二条院で匂宮が浮舟を見つけるに至る過程は、「例ならぬ童」がいたことに基づく。東屋巻で、童の姿を匂宮が見つけたくだりと、【A】を踏まえて、【B】がある。すなわち、東屋巻の描写を踏まえて、【B】がある。だが、東屋巻で中君に仕える右近は、浮舟巻で浮舟に仕えている。物語には書かれていないが、中君から浮舟へと仕える相手を変更したのだろうか。

しかし、そのようには考えられない。浮舟巻では、次の叙述も存在するためである。

【C】

〔右近は〕「右近が姉の、常陸にて人二人見はべりしを、ほどほどにつけては、ただかくぞかし。……東の人になりて、まま〔＝乳母〕も今に恋ひ泣きはべるは、罪深くこそ見たまふれ。……」

（浮舟／⑧八〇頁）

浮舟が、薫と匂宮との間で思い悩む傍らで、右近の姉が常陸の国で二人の男と関わり、殺生沙汰を起こした話を右近が語る。傍線にあるように、浮舟巻で、右近は浮舟の乳母である「まま」の娘である。つまり、右近は浮舟と乳母子の関係にある。蜻蛉巻でも、「幼かりしほどより、つゆ心おかれたてまつることなく、塵ばかり隔てなくてならひたるに」（⑧一〇二頁）とあることから、浮舟巻と蜻蛉巻では、右近は乳母の娘であり、浮舟に仕えていることになる。従って、東屋巻と浮舟巻で、【A】と【B】、【A】と【C】の右近に関する叙述に矛盾がある。

だが、問題はそれだけに留まらない。浮舟巻には、浮舟への匂宮の懸想を、「大輔が娘」から聞いた弁の尼が語るくだりが

ある。

【D】

尼君うち笑ひて、「この宮〔＝匂宮〕の、いとさわがしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ。おほかたは、いとめでたき御ありさまなれど、さる筋のことにて、上のなめしとおぼさむなむわりなき、と大輔が娘の語りはべりし」と言ふにも、

（同⑧六八頁）

この叙述を踏まえると、右近は二人存在するように見える。しかし、そうなると、【B】で、匂宮が東屋巻の右近と同定したことと食い違う。【B】と【D】の叙述に違和感を覚えるのである。

このように、二巻において、右近が二人であると捉えても、一人であると捉えても、解決しがたい問題が生じるのである。

二、東屋巻と浮舟巻の連繋

ところが、東屋巻と浮舟巻は、右の矛盾を除いて、緊密に連繋していることが知られる。浮舟巻が、東屋巻を踏まえて叙述している箇所を示すと、次の通りである。

(1) 宮〔＝匂宮〕、なほかのほのかなりし夕べをおぼし忘るる世なし。

（浮舟巻／⑧一一頁）

(2) 〔匂宮は〕「いと便なきことなれど、『かの宇治に住むらむ人は、はやうほのかに見し人の、行方も知らずなりにしが、大将〔＝薫〕に尋ね取られにける』と聞きあはすることこそあれ。……」

（同⑧二一頁）

(3) 〔右近は〕「今はよろづにおぼほれ騒ぐとも、かひあらじものから、なめげなり。あやしかりしをりに、いと深うおぼし入れたりしも、かうのがれざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかは」と思ひなぐさめて、

（同⑧三〇頁）

(4) 「……あやしかりし夕暮のしるべばかりだに、かう尋ね出でたまふめり。ましてわがありさまのともかくもあらむを、聞きたまはぬやうはありなむや」と〔浮舟は〕思ひたどるに、

（同⑧六〇頁）

(1)〜(4)の傍線は、【A】【B'】の二条院で匂宮と浮舟が出会った出来事を指している。加えて、【D】でも、「大輔が女のかたりはべりし」と、二条院での出来事が踏まえられている。東屋巻を前提に浮舟巻が書かれていると言える。

例として挙げたものは、過去の助動詞である「き」を用いている。小田勝によれば、「き」は、遠く隔たった過去に存在し、かつ現在は存在しない過去の事態の回想に用いられる。[3] この指摘に従うと、浮舟巻の時点よりも隔たった過去の時点は、おのずと東屋巻における二条院での出来事を想起していることになる。

さらに、東屋巻と浮舟巻の連繋を確認する上で、女房に目を向けたい。浮舟物語で女房として登場するのは、右近・侍従・弁の尼・乳母の四人である。このうち、右近と侍従は、浮舟が入水を決意する契機を図らずも作ってしまった点は、先学の指摘されている通りである。[4]

さて、ここで注目すべきは、右近と侍従ではなく、右近と乳

母である。【A】で匂宮と浮舟を目撃したのは、右近と乳母である。この東屋巻の情況を踏まえて、浮舟巻でも、浮舟と匂宮との逢瀬に、この両名が関わっている。

匂宮が初めて宇治の邸を訪れ、垣間見をした際、右近の発言から乳母が不在であることを知り、薫を装って浮舟との逢瀬を果たす。匂宮が、宇治の邸へ二度目の訪問を行った後には、「かのさかしき乳母、娘の子産むところに出でたりける」（⑧五八頁）とあるように、二度目の訪問の際にも、乳母は不在であった。乳母が宇治の邸に戻ってきてからは、「乳母のいとさかしければ、難かるべきよしを聞こゆ。」（⑧六五頁）と、乳母の存在によって、浮舟が匂宮の手紙を容易に読むことができない情況にあることが知られる。薫によって宇治の邸の警固も厳重になる中、匂宮が三度目の訪問を行う。侍従は、匂宮の使いである時方に、浮舟に逢えない理由を語るが、「乳母のいざときことなども語る」（⑧九〇頁）と、乳母の存在も理由として示されている。

浮舟巻で匂宮が宇治の邸を三度訪れたとき、匂宮が浮舟との逢瀬を果たしたのは、乳母が不在であった一度目と二度目である。右近は、他の女房に薫ではないと知られないように、画策する。他の女房は、匂宮と面識がないので、薫ではない誰かと捉えるだろう。すなわち、匂宮に会い、匂宮と分かるのは、東屋巻で、匂宮と浮舟の事件を目撃した右近と乳母なのである。[5]

このように、東屋巻と浮舟巻は、物語の情況が齟齬なく連繋していることが確認できる。矛盾の存する箇所は、右近に関する叙述だけなのである。この二巻の繋がりを踏まえた上で、次節から具体的に二人説および一人説の根拠を、それぞれ見ていく。

三、右近を二人と見る説

従来述べられてきた二人説の根拠を纏めると、次の三点となる。

① 東屋巻では中君に仕える女房で、浮舟巻では浮舟に仕える女房である。

② 東屋巻では大輔の娘であるのに対し、浮舟巻では乳母の娘である。

③ 浮舟巻において、弁の尼の発言にある「大輔が女」が、浮舟巻の右近とは異なる人物を指している。

①は【A】【B】を踏まえる。初めて指摘したのは、『弄花抄』であろう。該書は、【A】を「右近とて大ゆふむすめ　中君の方の女房とみゆ」、【B】を「東屋に匂の事見付し人歟」と、【A】の右近と同一人物か、疑義を呈する。[6] また、『岷江入楚』では、『弄花抄』を引き、「浮舟にさぶらひし右近とは各別の事、勿論也」と、【A】【B】に登場する右近が別人であることを説く。『湖月抄』師説も、東屋巻と浮舟巻に登場する右近は別人と解する。なお、二人説に立つ古注釈では、②・③には触れていない。

また、①について玉上琢彌は、東屋巻と浮舟巻の右近を混同した「ケヤレス・ミス」で、中君付きの女房であったのを思い違いした、[7] とする。同様に原田真理も、右近を二人と見て、その別人を作者が取り違えた原因に関して、右近という名前にあ

る一定のイメージがあったために、混同したことを想定する。[8]
両者は、古注釈が東屋巻と浮舟巻で、右近が別人である理由をケアレス・ミスと捉え、なぜそれが起こったかを論じる。だが、ケアレス・ミスであるかどうか、検討が必要であろう。これについては第六節で言及する。

次に、②は【A】【C】を踏まえる。東屋巻と浮舟巻の右近は、出自を異にしているため別人とする。池田和臣は「浮舟巻以降の右近は、浮舟の乳母の娘であり浮舟づきの侍女、東屋巻の右近は大輔の娘」[9]と、全面的に右近が二人いると断じる。①・②は、連動する。東屋巻まで読んだ読者は、大輔が中君に仕えており、大輔の娘である右近も同様に中君に仕えていると考えるはずである。そこで、浮舟巻で乳母の娘として昔から浮舟に仕えていたという内容は、読者に違和感を与えるだろう。従って、どちらか一方に矛盾がないとは言えない。

最後に、③は【B】【D】を踏まえる。①・②に従って二人説に立った場合、【B】で匂宮が東屋巻の右近と同定したことと【D】は食い違う。それゆえ、古田正幸は、【B】について、「匂宮が東屋巻で聞いた右近と同じ呼称を持つ別の侍女が、浮舟巻で右近と名のる声を、匂宮が耳にすることを意味する」[10]として、【A】【B】の齟齬を解消させ、浮舟巻の右近と異なる人物と認識した叙述として、【D】を捉える。【B】【D】のみに限れば、「大輔が娘」が浮舟巻の右近とは別人であることが知られる。だが、【A】【B】については、古田と同様の解釈を当時の読者が行ったと立証できない限り、読者が違和感を覚える箇所であると思われる。

四、右近を一人と見る説

一方、一人説の根拠は、東屋巻と浮舟巻が右近の叙述を除いて、緊密に連繋している点に尽きる。従って、二人説の根拠①～③を解消することで、一人説の優位を主張する。

①について、『一葉抄』では「中君の女房なるべし」とあるように、【B】の右近を、【A】の右近と同一人物とする。[11]『弄花抄』とは異なり、浮舟巻の右近も、中君に仕える女房とし、右近を一人とする。また、北村久備の『すみれ草』も、右近を一人と捉える。

按ずるに右近といふ人二人にて、中君と浮舟との女房のよし、『湖月抄』に見えたれば、しばらく夫にしたがひて、二人とす。然れども、二人の事とは聞えず。

その根拠としては、一つ目に、【B】にあるように、右近が浮舟に仕える女房であった場合、二条院での出来事との同定は成り立たない。二つ目に、【D】にある弁の尼は、宇治の邸にのみいる人物であるため、二条院の出来事や匂宮の様子を知るのは、右近だけであり、同じ宇治の邸にいる右近から話を聞かないと、この発言が成り立たない。①・③に対して、疑義を示すことで、東屋巻と浮舟巻の右近が、同一であると説く。[12]

注目すべきは、久備はその傍証として、右近が薫に対して語る、

【E】

この宮の上の御方に、忍びてわたらせたまへりしを、あさましく思ひかけぬほどに、入りおはしましたりしかど、い

みじきことを聞こえさせはべりて、出でさせたまひにき。それに懼ぢたまひて、かのあやしくはべりし所にはわたらせたまへりしなり。　（蜻蛉／⑧一三二～一三三頁）

を引く。二条院における事件に対して、右近自身がその対応を語っている。つまり、浮舟巻・蜻蛉巻の右近は同一人物で、東屋巻における二条院の出来事に対処した人物とも同一人物である。従って、東屋巻と浮舟巻に限って矛盾があることになる。この点は留意されたい。

古注釈では、書かれている物語内容から右近が一人であるとする。対して、従来の研究では、物語に書かれていない内容から一人と判断する。小山敦子は、「中君の老女大輔の娘、右近が、浮舟の女童であった」[13]と解釈することで、①の解消を図る。同様に、工藤進思郎も、右近が仕える相手が中君から浮舟へと変わったと理解することで、①を一人として捉えて読めるとする[14]。さらに、稲賀敬二は、①～③を、読者の自由な読みによって、作者が書かなかった点を補うことで、右近を一人として認められうる案を提示する[15]。いずれも、書かれていない物語内容を埋め合わせることで、右近が一人であるという「読み」を提示する。

しかし、それは各論者が、①～③を認めていることになるのではないか。古注釈にせよ、従来の研究にせよ、矛盾を踏まえた上で、右近が一人であると解釈できる「読み」を行っている。それでは、根本的な解決とはならないと思われる。なぜこのような矛盾が起こったのかを、考える必要があるだろう。

五、なぜ矛盾が生じたか

古注釈以来、東屋巻と浮舟巻の右近は、矛盾を有することが指摘されてきた。そして、矛盾がある中で、二人であるか、一人であるかを判断しようとしてきた。だが、なぜ矛盾が起きたのか、この点についてはあまり考えられてこなかったように思われる。東屋巻と浮舟巻に亘る矛盾は、なぜ起こったのだろうか。

この点に触れたのが、藤村潔である。

匂宮は中君づきの女房として右近を知っていたから、その応対の仕方から、浮舟を一介の新参の女房ではあるまいと判断し得たわけである。……右近は浮舟に幼い時からずっと仕えて来た女房であった事になっている。言うまでもなく、これははなはだしい矛盾である。……東屋巻から蜻蛉巻まで一貫して物語の中心を歩んだ端役である右近について、作者がこのような重大な誤りをおかすにはそれ相当の理由があったはずである。……作者の構想中で、宇治河投身が中君から浮舟に変更されたため、投身のために構想されていた右近をも不用意に中君から浮舟に移しかえてしまったものであろう[16]。

藤村は、作り手側の「構想の変化」に伴って、①・②が生じたと説く。この指摘で重要なのが、矛盾は読み手側の問題ではなく、作り手側の問題である、という点である。物語では、巻を追うごとに新たな設定を付け加えていく。その設定に矛盾がない場合、読み手は違和感なく付加された情報を蓄積させ理解す

る。例えば、髭黒は登場当初、胡蝶巻では、右大将であったが、行幸巻で、色黒で髭が濃い容貌であると語られる。

一方、矛盾がある場合は、設定の変更として捉えられるのではないだろうか。すなわち、東屋巻で書かれた【A】と、浮舟巻で書かれた【B】【C】で、右近の設定に矛盾があるのは、【A】から【B】【C】へと右近の設定を変更したため、と考えられる。

成立当初の『源氏物語』は、写本として一巻単位で流布するため、既に成立し、流布した巻は書き直すことができない。従って、変更したい設定や、付け足したい設定は、後の巻で書くしか方法がない。ゆえに、東屋巻の右近の設定と、浮舟巻の右近の設定に矛盾があった場合、東屋巻を踏まえて、浮舟巻を読む読み手は、浮舟巻で付け加えられた設定を、変更された設定と捉えたはずである。とすれば、①・②は、東屋巻での設定から、浮舟巻で変更された設定として捉えられる。[17]

また、設定が変更されたとき、変更された前の巻の設定は踏まえない。浮舟巻で変更した、乳母の娘で浮舟に仕える、という設定を、蜻蛉巻でも踏まえている。しかし、東屋巻の、大輔の娘で中君に仕える、という変更されてしまった設定は踏まえていない。よって、③の根拠である、【D】の「大輔が女の語りはべりし」は、右近の設定を変更したため、大輔の娘は今宇治の邸にいる右近ではない、ということを読み手に示唆したと捉えられる。東屋巻の、右近が大輔の娘で中君に仕えるという設定は、浮舟巻で変更されて踏まえないため、【D】は、右近ではない別の誰かと考えられるのである。ただし、第二節や第四節でも述べたが、浮舟・蜻蛉巻では、東屋巻における二条院の出来事に対処した人物が右近であると語られており、その設定は東屋巻から引き継がれている。

一方、右近に関する叙述の矛盾に対して、読み手の捉え方はどうであったか。

成立当初の『源氏物語』の読み手は、五四巻の揃いの状態ではなく、一巻単位で享受がなされたはずである。また、巻序のない状態で読むため、成立したもの、あるいは手に入れたものから順に読んだことになる。従って、右近に関する叙述で、読み手が矛盾を捉えるのは、東屋・浮舟の両巻を所持し読んだ場合である。作り手がある巻で書いた設定を、後の巻で変更したように、読み手も、ある巻に書かれた設定と、後の巻に書かれた設定が異なる点に触れて、設定が変更されたと理解していたと考えられる。それは、やはり写本の場合、既に成立し、流布した巻は書き直すことができないため、変更したい設定や、付け足したい設定は、後の巻で書くしか方法がなかったのである。このことが、成立当初の作り手と読み手の共通認識としてあった、と言える。古注釈の時点では、既に五十四帖という『源氏物語』の総体が定まっており、巻序に従って読むわけであるから、このような共通認識を欠いていたものと見られる。石田穣二は、

収拾がつかないから、作者のケアレス・ミスではないかとする説があるが、万に一つもその可能性はない。我々でも、一読、頭のクラクラするような奇妙なミスを、あの明敏な作者が犯すだろうか。

解読の方法は一つしかない。アレはアレ、コレはコレと読むほかないのである。二つを結び付けて、両者を矛盾なく理解しようとする方法は捨てなくてはならぬ。[18]

と矛盾があっても、それは措いて、物語を読む必要があるとする。しかし、『源氏物語』生成当初の作り手と読み手の共通認識を踏まえれば、当時は矛盾のある叙述を変更された設定として理解し、読み進めた可能性も考えられよう。

東屋巻・浮舟巻で生じた、右近に関する叙述の矛盾は、当時の生成・享受の様相に照らして考えると、『源氏物語』生成当時の作り手が、浮舟巻を書くにあたって変更した設定である。そして、生成当時の読み手は、右近に関する叙述である①～③を矛盾ではなく、変更された設定として捉えていたと考えられる。石田も述べるように、右近の問題に限っては、①～③以外、東屋巻・浮舟巻では、物語の情況は緊密に連繋し、矛盾がない。従って、右近は一人であり、①～③は右近の設定を変更したために起きた矛盾であると考えることで、この問題を解消させることができよう。

なお、本稿で述べる「設定の変更」は、藤村の述べる「構想の変化」とは異なる。藤村は、中君が入水するはずだったという実現されなかった構想と、右近の設定が前巻と後巻で変更されていることとを、併せて「構想の変化」とする。しかし、本稿では、実現されなかったが、作者が当初考えていたとする前者は踏まえず、後者を「設定の変更」として扱う。前者は、作者の頭の中にあり、物語にはないものであって、証明できないからである。藤村は、中君が入水するはずだった構想を、浮舟が入水するものに変更したことで、右近の設定が変更せざるを得なくなったとする。しかし、初めから述べたように、書かれた物語内容で矛盾があるのは右近の設定だけであり、藤村の言う「構想の変化」を想定せずとも、「設定の変更」で説明がつくのである。

六、なぜ設定を変更したか

では、なぜ作者は、右近の設定を変更したのだろうか。

玉上・原田が述べるように、右近の設定がケアレス・ミスで変わったのではないかという疑念が生じる。しかし、それは考えがたい。ケアレス・ミスであれば、浮舟巻以降の巻で右近を再び東屋巻での設定に改めることもできたはずである。しかるに、【E】で右近は、浮舟巻の設定のままである。従って、蜻蛉巻は、浮舟巻を踏まえて書かれている。加えて、次の叙述も、浮舟巻を念頭に置いている。

今は限りと思ひ果てしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人々はさしも思ひ出でられず、ただ、親いかにまどひたまひけむ、乳母、よろづに、いかで人なみなみになさむと思ひ焦られしを、いかにあへなきここちしけむ、いづこにあらむ、われ世にあるものとはいかでか知らむ、同じ心なる人もなかりしままに、よろづ隔つることなくかたらひ見馴れたりし右近なども、をりをりは思ひ出でらる。

（手習／⑧一九五頁）

浮舟は小野で母や、乳母、そしていつも身近にいた右近を懐かしく思い出す。その浮舟の心中が語られる。傍線は、浮舟巻で

「親もいと恋しく、例はことに思ひ出でぬ弟姉のみにくやかなるも、恋し。宮の上を思ひ出できこゆるにも、すべて今一度ゆかしき多かり」（⑧九四頁）と、浮舟が入水を決心した場面に呼応する。点線で、右近は浮舟の乳母子で浮舟付きの女房として扱われている。従って、手習巻もまた、右近は浮舟巻の設定で書かれていることになる。ケアレス・ミスとした場合、後巻にあたる蜻蛉巻・手習巻の右近が、浮舟巻の設定を用いる積極的理由がないと思われる。

次に、なぜ東屋巻と浮舟巻との接続を、右近に担わせたのだろうか。それは、右近を用いざるを得なかったからではないだろうか。すなわち、東屋巻と浮舟巻を繋ぐ上で、浮舟と匂宮との関係を知る人物を、浮舟の近くに置く必要が生じたため、右近が選ばれたと考えられる。

初めて匂宮と浮舟が遭遇したとき、その場に居合わせたのは、右近と乳母の二人であった。もし東屋巻を書く時点で浮舟巻以降の構想があったならば、中の君付きの女房ではなく、浮舟付きの女房として右近を登場させれば良いはずである。しかし作者はそうしなかった。つまり、東屋巻を書き終えた時点では、浮舟巻以降の構想はなかったことが知られる。

だが、作者は匂宮が浮舟との逢瀬を、浮舟巻で書くにあたり、匂宮が初めて浮舟と出会ったことが語られる東屋巻と連繋させねばならない。そうしなければ、(1)(2)と浮舟巻劈頭から続く、匂宮が宇治行きを画策する動機にもなりえない。とすれば、二条院で匂宮が浮舟に遭遇した場に居合わせた右近・乳母が浮舟巻でも必然的に選び出されてくる。

この両名が浮舟巻に登場することで、東屋巻と浮舟巻を繋ぐことが可能となる。一方で右近を乳母の娘と変更することで、浮舟のそば近くに置くことができる。乳母子かつ浮舟付きの女房となれば、浮舟の心中を察しながらも、さまざまな対応を取ることで、浮舟が入水の意思を固めていくことへと繋がっていく。つまり、設定を変更したことで、右近は浮舟を入水へ導くために用意された駒として機能するのである。

続く蜻蛉巻でも、浮舟の失踪後、浮舟の手紙から入水と察するのは右近である。侍従と相談して浮舟の母に事情を打ち明け、薫の来訪を待たずに葬儀を執り行う。来訪した薫には、浮舟の心情や死の真相を説明し、匂宮の召しには侍従を送って対応する。従って、蜻蛉巻では、浮舟が失踪した後の対応を取る女房を置く必要があったために、右近が利用されたと考えられる。殊に、右近は浮舟巻で匂宮との関係を周囲に知られないよう腐心していたから、浮舟が入水した理由も察知できた。ゆえに、浮舟の失踪後、それに伴う事後処理を行う人物として選ばれたのだろう。

このように、右近は浮舟・蜻蛉巻で一貫した行動がなされていることから、浮舟巻を書くにあたり、少なくとも蜻蛉巻までの構想はあったものと思われる。

浮舟巻で匂宮との逢瀬により浮舟が入水を決意し、蜻蛉巻でその失踪と事の次第を匂宮・薫・母が知るという構想の中で求められるのは、浮舟の心中や真相を知り、浮舟のために対応してくれる人物である。作者は、東屋巻までの構想から、新しく浮舟巻で右の構想を進めるとき、右の人物を打ち出す必要があ

った。ただし、既に東屋巻で浮舟と出会っており、東屋巻との接続が必要となるので、乳母・右近を利用しなければならなかった。それゆえ、右近の設定を一部変更することで、構想の変化に対応させたと考えられる。作者が東屋巻までを書いた時点で抱いていた構想は物語には書かれなかったため、推し量るべくもないが、意図的に右近の設定を変更した点から、以上のような構想の変化を読み取れるのではないだろうか。

なお、浮舟巻で「大輔が娘」という東屋巻への言及は、矛盾の露呈を読者に示すことに繋がるのではないとの反論が出よう。だが、【D】で「大輔が娘」とあえて言及することで、その人物が「右近」ではない中の君付きの女房であることを暗に読者に知らせているのではないだろうか。右近が東屋巻から引き継がなかった設定は、出自が「大輔が娘」である点と、中の君付きの女房である点である。そのため、「大輔が娘」を引き合いに出すことで、右近ではないことを読者に印象づけたのであろう。

おわりに

以上、従来論じられてきた東屋巻と浮舟巻における右近の問題を見てきた。

右近に関する叙述の矛盾は、作り手側の問題である。成立当初の『源氏物語』は、写本として流布するため、既に成立し、流布した巻は書き直すことができない。従って、変更したい設定や、付け足したい設定は、後の巻で書くしか方法がない。それゆえ、作り手が、右近の設定を、浮舟巻で浮舟に仕える乳母の娘と変更したために、①・②の矛盾が生じた、と考えられる。

また、設定が変更されたとき、変更された前巻の設定は踏まえない。右近の設定は浮舟巻で変更されたため、東屋巻における、大輔の娘で中君に仕える、という設定は引き継がれない。それゆえ、③の、浮舟巻に存する「大輔が女」は、右近を指しておらず、右近とは別の人物であると読者に暗に示ししたものであると捉えられる。

このように、二人説の根拠①〜③は、右近の設定が浮舟巻で変更されたと考えれば、すべて解消され、右近は一人であると認められる。右近の設定が変更された理由は、東屋巻を書いた時点での構想と、浮舟巻以降の構想に変化があったと考えられる。作者が東屋巻から浮舟巻へと移行する際、浮舟巻以降の構想を練り直したか、東屋巻を書き終えて一旦筆を擱いたのだろう。

古注釈以来考えられてきた右近の問題は、矛盾と捉えられながら、当時の成立・享受の様相は踏まえられてこなかった。『源氏物語』に限らず、当時の作り物語の成立と享受の様相を理解し、矛盾を捉える必要があったと思われる。現代の読者にとって「矛盾」や「齟齬」と見えるものも、当時の読者にとっては、変更された設定として認識されたはずである。その認識を欠いていたことが、この問題が長らく解決されてこなかった要因と思われる。東屋巻と浮舟巻における右近の矛盾は、そうした当時の『源氏物語』ひいては作り物語の生成と享受のあり方を示す一事例として捉えられよう。

※引用は、『源氏物語』が新潮日本古典集成、『弄花抄』・『岷江入楚』が源氏物語古注集成、『すみれ草』が中野幸一編『九曜文庫蔵源氏物語享受資料影印叢書10』（勉誠出版、二〇〇九）に拠る。冊数・頁数も同様。引用した本文は、表記を私に改めた箇所がある。

注

（1）福田孝「「右近」は一人か」鈴木一雄・石杢敬子『源氏物語　鑑賞と基礎知識25　浮舟』至文堂、二〇〇二）参照。

（2）『源氏物語大成』によれば、青表紙本は、「ほかけ」とする。本稿では、浮舟巻が東屋巻を踏まえて書かれているため、河内本・別本の数本にある「ほのか」に改めた。このほか、掲出した『源氏物語』本文は、すべて『源氏物語大成』により諸本間の異同を調べたが、文意に関わる異同は見えない。

（3）小田勝『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院、二〇一五）一五〇頁、参照。

（4）右近と侍従に関する論稿は、以下を参照。
蔵永浩子「『源氏物語』の方法―女房の役割をめぐって―」（『女子大文学（国文篇）』三四、一九八三）
沢田正子「浮舟物語の家司・女房たちの役割」（秋山虔『講座源氏物語の世界』第九巻、有斐閣、一九八四）
高橋美穂子「浮舟の運命と女房達―右近・侍従の役割について」（『羽衣国文』八、一九九五）
福永佳子「『源氏物語』宇治十帖の端役―「浮舟」巻における右近と侍従の役割―」（『清心語文』八、二〇〇六）
野村倫子「浮舟入水の脇役たち―「東屋」から「浮舟」への構想の変化を追って」（『『源氏物語』宇治十帖の継承と展開―女君流離の物語』和泉書院、二〇一一）

（5）浮舟の乳母の役割に関しては、吉海直人「浮舟の乳母達」（『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社、二〇〇八）参照。

（6）『弄花抄』以後の一六世紀成立の古注釈も、『林逸抄』は「別人なるべし」、『孟津抄』は「別人也」、『紹巴抄』は「別人歟」とする。東屋巻では右近は中君に仕えるのに対して、浮舟巻では浮舟に仕える点に、疑問ないしは不審を抱いていたことが窺える。

（7）玉上琢彌『源氏物語評釈　第十二巻』（角川書店、一九六八）四八頁参照。

（8）原田真理「源氏物語における右近像」（『平安文学研究』七五、一九八六）参照。また、待井新一「浮舟の復活をめぐって―源氏物語第三部の内部矛盾考―」（『国語と国文学』五三・九、一九七六）でも、右近の問題に触れて、作者の錯誤か否かが述べられている。

（9）池田和臣「二人の右近と二人の少将―『夜の寝覚』の『源氏』解釈―」（『日本古典文学会々報』一〇九、一九八六・四）参照。

（10）古田正幸「宇治十帖の二人の右近」（『平安物語における侍女の研究』笠間書院、二〇一四）参照。

（11）『万水一露』・『林逸抄』でも、同様の注を引く。

（12）初めて『すみれ草』の一人説を取り上げたのは、工藤進思郎「浮舟の物語における右近―その二人説への疑問―」（『日本文芸論稿』一、一九六七）であるが、具体的な根拠に関しては言及されていない。

（13）小山敦子「女一宮物語と浮舟物語」（『源氏物語の研究』武蔵野書院、一九七五）参照。

（14）前掲注(12)の工藤論文、参照。

（15）稲賀敬二「夕顔の右近と宇治十帖の右近―作者の構想と読者の想像力―」（『源氏物語の世界　方法と構造の諸相』風間書房、二〇〇一）参照。稲賀も指摘し、前掲注5の原田論文にも指摘はあるが、宇治十帖の右近は、夕顔巻の右近と造型が近い。以下を参照。
吉井美弥子「浮舟物語の一方法―装置としての夕顔―」（『中古文学』三八、一九八六）
加藤松次「『源氏物語』女房論―右近の場合(一)・(二)―」（『国語―教育と研究―』三六・三八、一九九七・一九九九）

（16）藤村潔「橋姫物語と浮舟物語の交渉」（『源氏物語の研究』桜楓社、一九八〇）参照。藤村への反論は、秋山虔「浮舟をめぐっての

試論」（『源氏物語の世界―その方法と達成―』東京大学出版会、一九六四）、吉岡曠「宇治十帖の構想」（『源氏物語論』笠間書院、一九七二）、前掲注(13)の小山論文などを参照。

(17) 右近と同様に、設定に矛盾がある人物に柏木がいる。柏木は、第一部で玉鬘に異母兄弟であるとは知らずに懸想をする。だが、第二部では「皇女たちならずは得じ」（若菜上／⑤二九～三〇頁）とあるように、皇女を娶るために、独り身を貫いている。この矛盾はおそらく、第一部の終着である藤裏葉巻と、第二部の始発である若菜上巻の間で構想の変化があったためと見られる。若菜上巻で女三宮に執心し、密通する役割を新しく持たせる上で、「皇女たちならずは得じ」という思考が柏木にある点を読者に示したと考えられる。

(18) 石田穣二「作り物語の方法」（『国文学 解釈と鑑賞』五九・三、一九九四）参照。

（たかはし・りょう）